古代エジプトの「ピラミッド・テキスト」における *mꜣʿti*

肥　後　時　尚

は　じ　め　に

マアト（*mꜣʿt*）は，「宇宙の秩序」や「正義」，「真実」等の意味を持ち，古代エジプトの文化や社会に絶えず影響を与え続けた抽象概念である。この概念は抽象概念の意味に留まらず，正義や真実を司るマアト女神（*Mꜣʿt*）として神格化された。マアト女神は，通常頭にダチョウの羽根を載せた一柱の女性の姿で描写されるが，エジプト新王国時代以降の「死者の書」をはじめとする一部の史料において「二柱のマアト」（*Mꜣʿty*）と呼ばれる二柱の女神として現れ，死者の裁判の場面において重要な役割を担う。本来一柱である女神が二柱の女神の姿に変化する事例は，古代エジプト宗教においても極めて稀であり，変化の理由やそれぞれの女神の役割に関して研究者によって多様な解釈が示されたが，依然として最終的な結論には至っていない。その理由の一つとして，先行研究の多くが「死者の書」を中心とした新王国時代の史料の用例分析に留まる傾向にあり，エジプト中王国時代以前の史料の分析は十分になされていないことが挙げられる。そのため，今後の研究では「二柱のマアト」の起源にふれる議論や史料研究の蓄積が求められる。このような背景を踏まえ，本稿では「二柱のマアト」の起源を探る研究の一つとして，先行研究で十分に検証されていないエジプト古王国時代の「ピラミッド・テキスト」に記述された「二柱のマアト」の意味を持つ語 *mꜣʿti*[1]の内容を再検討する。

1　「二柱のマアト」（*Mꜣʿty*）をめぐる議論

マアト女神（*Mꜣʿt*）は，正義や真実を司る古代エジプトの女神である。この女神は宇宙の秩序や正義，真実，公正を意味する抽象概念であるマアト（*mꜣʿt*）の神格化であり，頭にダチョウの羽根を載せた女神の図像（𓁢）で描写される。神格化された時期については明らかではないが，エジプト古王国時代の史料上に既に女神の限定詞が確認されることから，遅くとも古王国時代には神格化されていたことがわかる[2]。古王国時代以降もマアト女神は，様々な種類の史資料上に文字や図像で描写され，正義や真実を司る女神としてエジプトの文化に影響を与え続けてきた。その一方で，この女神は一部の史資料のなかで，一柱の女神ではなく，「二柱のマアト」（*Mꜣʿty*）と呼ばれる二柱の女神の姿で描写されることがある。例えば，新王国時代の「アムドゥアトの書」[3]には，太陽神の船を先導する二柱のマアト女神が描写され[4]，主として新王国時代以降に利用された「死者の書」では，下界の神オシリスによる死者の裁判に携わる二柱の女神の姿で登場

する[5]。本来一柱で描かれる女神が二柱の姿となって現れる事例は，神々の姿が多様に変化する古代エジプトの宗教においても稀である。しかし，「死者の書」のなかで最も重要な死者の裁判の場面において，裁判が行われる広間が「『二柱のマアト』の広間」（*wsḫt Mꜣʿty*）[6]と称されることから，これらの女神が死者の裁判において重要な役割を担うことは明らかである。

このような重要性と特殊性から，「二柱のマアト」（*Mꜣʿty*）は様々な研究者の関心を集めてきた。初期の研究では，ブレステッドは，*mꜣʿty* の語が女神や概念の双数を意味するのではなく，単語の意味を強調する目的で表現されると推測したが[7]，ブリーカーはこの語を明確な二柱の女神として認めている[8]。ブリーカーは，一部の図像において二柱のうち一方のマアト女神が緑色で描かれている点を指摘し，二柱のマアト女神がそれぞれ現世と死後の世界のマアト女神であると考察した[9]。このブリーカーの主張は広く受け入れられたが，その後ヨヨッテはこの解釈に疑問を示し，レトポリスの神話から「二柱のマアト」が太陽と月，つまり太陽神の日中と夜の姿の隠喩であると結論づけた[10]。シーバーは，「死者の書」に記された「二柱のマアト」の図像を数多く提示し，新王国時代の「二柱のマアト」の図像的特徴を分析している[11]。彼女は二種類のマアトがそれぞれ日中と夜間の太陽の船の運航を案内する役目をもつと主張し，この「二柱のマアト」の発生が，マアト女神の倍加（もしくは増加）ではなく，マアトの本来的な意味である秩序の概念の「分割」（Aufteilung）に由来すると推測した[12]。グリースハマーとアルテンミュラーは，それぞれエジプト第一中間期から中王国時代にかけて利用された「コフィン・テキスト」[13]上の「二柱のマアト」の記述に言及している[14]。特にアルテンミュラーは，シンクレティズムの視点から「二柱のマアト」がシューやテフヌートといった他の神々と同一視された可能性を指摘した[15]。近年の研究では，スミスも「二柱のマアト」の内容に触れ，「死者の書」に登場する以前の「二柱のマアト」がオシリスよりも太陽神と密接な関係にあったと説明を加えている[16]。

このように，「二柱のマアト」に関する議論は，これまで多くの研究者によって継続されてきた。しかしその一方で，マアト女神が二柱の姿で現れることとなる正確な理由を巡る解釈は研究者による一致をみておらず，未だ最終的な結論にいたっていない[17]。その理由の一つには，先行研究の多くが「死者の書」をはじめとするエジプト新王国時代以降の史料の分析に依拠し，エジプト古王国時代や中王国時代の「二柱のマアト」の事例が十分に検討されていない点が挙げられる。また，各時代の史料に描写された「二柱のマアト」の内容を比較・考察する通時的な研究もこれまでなされていない。このような状況を踏まえ，本稿では，「二柱のマアト」の更なる理解を目指す研究の一つとして，古王国時代の葬祭文学である「ピラミッド・テキスト」における *mꜣʿti*[18]の記述の内容を考察する。

2 「ピラミッド・テキスト」第 260 番における *mꜣʿti*

「ピラミッド・テキスト」は，古王国時代に利用された古代エジプトにおける最古の葬祭文学である[19]。先行研究では，この史料上の *mꜣʿti* の記述が現在確認される「二柱のマアト」の初出とされている[20]。この史料において，筆者は *mꜣʿt* に関連する記述を 20 例確認した（表 1）。こ

表 1 「ピラミッド・テキスト」に記された *mꜣʿt*/*mꜣʿti* の事例一覧
本稿では，色のつけられた *mꜣʿti* に関する事例を検討する。

	呪文番号	*Pyr.*	テキスト	記述内容(抜粋)	部分訳
1	249	265c	W	*ii.n W m iw nsrsr* *di.n.W mꜣʿt im.f m st isft*	Wは炎の島からやって来た。 Wはそこからマアトをイセフェトの場所に置いた。
2	260	317a	W	*iw wḏʿ n W tfn ḥnʿ tfnt* *iw sḏm.n mꜣʿti*	W、「孤児」は、「孤児」 に対して訴訟を起こした。 *mꜣʿti* は聞いた。
3	260	317b	W	*iw Šw m mtrw* *iw wḏ.n mꜣʿti*	シューが証人である。*mꜣʿti* は命じた、
4	260	319b	W	*pr W ir(i) mꜣʿt int.f s(i) i(w).s ḥr.f*	W、マアトの守護者はそれ(マアト)をもたらすために出てゆく。その時それ(マアト)は彼とともにある。
5	260	323c	W	*pr W m hrw pn* *init.f mꜣʿt is ḥr.f*	Wはマアトをもたらすためにこの日に出てゆく、 その時それは彼とともにある。
6	440	815a	P/M/N	*ḥr m ʿnḫt.f nt mꜣʿt*	自身のマアトの笏にいるホルスよ！
7	519	1219a	P/M/N	*di.k ḥmsi P pn n mꜣʿt*	汝がこのPをマアトに座らせんことを！
8	539	1306c	P	*ns n P m mꜣʿi ir mꜣʿt prii.f rf šwii.f rf ir pt*	このPの舌はマアトの船へ導くものである、 彼が前に出て、天へ昇るために
9	539	1315a	P	*tbwti M pn m mꜣʿti* *prii.f rf šwii.f rf ir pt*	このMの両足底 は、「*mꜣʿti* の船」である、 彼が前に出て、天へ昇るために。
10	566	1429c	P/(N)	*ḏʿi sw Ḏḥwty m-tp ʿnḏ.k Zkr is ḫnti mꜣʿt*	彼を汝の羽根の上へと運べ、トートよ、 マアトの船の前にいるソカルとして！
11	573	1483c	P/M/N	*ʿnḫiw m mꜣʿt*	マアトを食べて生きる者たち
12	577	1520a	P	*ḳꜣ nb mꜣʿt r tpi rnpt*	マアトの主は年の最初の日に高く上がった。
13	585	1580	P	*…mꜣʿt*	…マアト
14	625	1768b	N	*…N mꜣʿt*	Nはマアトを(?)…
15	627	1774b	(P)/N	*…mꜣʿt m bꜣh Rʿ hrw pw n tpi rnpt*	…マアトを(？)この年の最初の日にラーの前に…
16	627	1775b	(P)/N	*pt m ḥtpw tꜣ m ꜣwt ib sḏm.n.sn dd N mꜣʿt m st isft*	Pがマアトをイセフェトの場に置いた時、 天は平安の中にあり、大地は喜びの中にある。
17	627	1785b	(P)/N	*…sšm N Rʿ n mꜣʿti.f*	…Nはラーを彼の「*mꜣʿti* の船」へと導く。
18	627 var.(?)	L.631	I	*zbb rʿ n mꜣʿti.f*	ラーを彼の「*mꜣʿti* の船」へ送る者
19, 20	758	2290b	Nt	*sḫwi n.k ir mꜣʿt n mꜣʿt ḏd(wt) n Nt*	Ntに言われしマアトのために(？)マアトに関する者(？)を集めよ！

のうち，呪文第 249 番（*Pyr.* 265c），第 260 番（*Pyr.* 319b，323c），第 440 番（*Pyr.* 815a）第 519 番（*Pyr.* 1219a），呪文第 539 番（*Pyr.* 1306c），第 566 番（*Pyr.* 1429c）第 573 番（*Pyr.* 1483c），第 577 番（*Pyr.* 1520a），第 585 番（*Pyr.* 1580），第 625 番（*Pyr.* 1768b），第 627 番（*Pyr.* 1774b，1775b），呪文第 758 番（*Pyr.* 2290b：2 例）[21] の 15 例が単数形 *mꜣʿt* として示され[22]，呪文第 260 番（*Pyr.* 317a，317b），呪文第 539 番（*Pyr.* 1315a），呪文第 627 番（*Pyr.* 1785b）の 4 例が双数形 *mꜣʿti* で記述されている。加えて，*mꜣʿti* の語はゼーテの「ピラミッド・テキスト」に含まれていない第 8 王朝のカカラー・イビの埋葬室南面に残るテキストにも 1 例確認された[23]。アレンが指摘するように，イビのテキストは，その他のより時代の遡る王のテキストの持つ伝統とは異なる様相を示している[24]。しかし，*mꜣʿti* の記述を持つテキストがペピ一世やネイトの墓に刻まれた呪文第 627 番のバリエーションであると考えられることから，この事例も後期の「ピラミッド・テキスト」として本研究の対象とする[25]。なお，単数形の *mꜣʿt* の記述については，双数形のマアトの内容を考察する本論文の目的から逸脱するため，各事例の出典となるテキストと部分訳を表 1 に記載するに留める。

まず，先行研究において「二柱のマアト」の最初期の事例として認識されてきた 2 例の *mꜣʿti* の記述に注目したい。この 2 例は「ピラミッド・テキスト」の第 260 番の *Pyr.* 317 に記述される。呪文第 260 番が一つの呪文の中にマアトに関する記述を 5 例含む点から，筆者はこの呪文の内容理解の必要性を提示し，呪文の解釈・翻訳を通して *mꜣʿt* および *mꜣʿti* の各事例の内容を考察

したことがある[26]。しかし，*mꜣʿti* の記述を含む小節 *Pyr.* 316-317 の解釈は，宗教的な内容や文法解釈の多様性の問題から、依然として議論の余地を残している。本稿では，*Pyr.* 316-317 に焦点を置き，テキストの文法上の問題を再整理し，2 例の *mꜣʿti* の内容を改めて考察する。

［事例 1, 2］*Pyr.* 316a-317c

［316］

a： *ḏd-mdw i Gb kꜣ Nwt Ḥr pi W*[27] *iwʿw it.f*

b： *W pi zbii*[28] *iii fdnw n fdw ipw nṯrw*

c： *inw mw d*(*i*)(*w*)*w ʿbʿbt irrw hy m ḫpš n itw.sn*

d： *i.mr.f mꜣʿ-ḫrw.f m irt.n.f*

［317］

a： *iw wḏʿ n W tfn ḥnʿ tfnt iw sḏm.n mꜣʿti*

b： *iw Šw m mtrw iw wḏ.n mꜣʿti*

c： *pḥr n.f nswt Gb ṯzii.f sw n mrt.n.f*

言葉を話すこと。おお，ゲブ，ヌートの雄牛よ！

W はホルス，すなわち彼の父の後継者である。

W は行った者であり，やって来た者であり，これらの 4 柱の神の 4 番目の者である。

水を運ぶ者であり，浄化を与えし者であり，彼らの父の大腿部によって歓喜する者である。

彼は，彼が行うことによって正当化されることを望む。

W，「孤児」は，「孤児」[29]に対して訴訟を起こした。*mꜣʿti* は聞いた。

シューが証人である。*mꜣʿti* は命じた，

ゲブの座が彼に戻らんことを，彼が自身を彼が望むことへ引き上げるために。

この呪文は，ゲブへの呼びかけから始まる。ゲブは一般に大地の神として表現されるが，ここでは，王権と強い結びつきを持つ神として現れている。ヘリオポリスの神話の中で，エジプトの最初の支配者となったのはゲブであり，その後オシリス，ホルスへと順に玉座が継承された[30]。この前半の呪文は，死せる王であるウニスが持つ王権の正当性を主張し，復活を望むことが主な内容であるとわかる。

古代エジプトの王はホルスと同一視されることから，「彼の父」（*it. f*）はオシリスを指すことがわかる。オシリスやホルスと王権の関係は，古王国時代に既に浸透していたヘリオポリスの神話として広く知られるものであった。

mꜣʿti の記述を含む *Pyr.* 317a から *Pyr.* 317b は故王であるウニスをめぐる神々の裁判を描写するものであるが，不明瞭な単語や多義的に解釈されうる箇所が複雑に入り組んでおり，研究者によっても翻訳や解釈の内容が異なる[31]。解釈の相違の主な論点は，次の 2 点に起因する。

Pyr. 317a：*tfn* と *tfnt* の解釈

両語の意味が不明瞭であるため，文脈による判断と内容の理解が難しい。*tfn* を故王とする解釈がある一方で，別の存在とする解釈も提示されている。さらに動詞 *wḏ*ˁ が自動詞と他動詞の双方の意味で解釈され，他動詞として解釈した際には，呼応する目的語が欠落した不自然な文章であることから，受動文とする解釈も見受けられる。不明瞭な *tfn* に対して，*tfnt* については，テフヌート女神（*Tfnt*）であるとする解釈もあるが，*LGG* では，この文章に現れる *tfnt* は通常の*Tfnt* とは異なる神として列記される[32]。

Pyr. 317b：の解釈

が大気の神シューと「空である」という動詞の意味を併せ持ち，「証人」を意味する *mtrw* は と の両方の形で表記されるため，が前置詞 *m* か *mtrw* の一部かの判断ができない。そのためをシュー，を前置詞とし「シューが証人である」という副詞文とする解釈や，を動詞，を *mtrw* の一部とし，「証人はいない」とする解釈などが混在する状況にある。

以上の論点から，翻訳も同様に *tfn* が動詞 *wḏ*ˁ の動作主となるのか，動作の対象となるのかについての解釈が分岐し，結果として文章の構造自体も研究者によって異なることとなる[33]。いずれの解釈においても，文章の内容の正確な把握は困難であるが，本稿ではゼーテやフォークナーの解釈を参考として拙訳を示した。筆者は *wḏ*ˁ を自動詞であると判断したが，他動詞として解釈した場合においても，*Pyr.* 317b の「*mꜣˁti* は聞いた」も同様に目的語が記述されていない点から，意図的に目的語を示さなかった可能性も考えられる。

アルテンミュラーは，この記述を「二柱のマアト」の最初期の事例とし，さらに「二柱のマアト」がシューとテフヌートと同一視されたとする解釈を示している[34]。しかし，前後の文脈からはこのような関係を確認することは難しい。先述した通り，テキストは故王と「孤児」（*tfn*）を同一視し，訴訟の相手として女性の「孤児」（*tfnt*）を示している。ここでアルテンミュラーは，*tfn* と *tfnt* が代替されたシューとテフヌートの名称であると解釈しているが，仮にそのように解釈した場合においても，この *tfn* と *tfnt* はそれぞれ法廷で争う立場にあり，第三者として登場する「二柱のマアト」とは明らかに別の神格として示される。したがって，文脈上 *tfn* と *tfnt* には *mꜣˁti* との明確な相関関係は見受けられず，これらの語が偶然に *mꜣˁti* の語の近い場所で記述された可能性は排除できない。

さらに，ここでの *mꜣˁti* が実際に「二柱のマアト」の描写であるかという点に関しても見解の相違が見受けられる。*Pyr.* 317b に着目すると，ここで *mꜣˁti* は明らかに他動詞 *sḏm* と *wḏ* の主語として，「聞く」や「命じる」という動作の主語として示される。マアトは，正義や真実の概念，もしくはそれらを示す象徴として頻繁に記述されるが，このような行為を伴う独立した神格として描写されることは少ない[35]。しかしながら，*Pyr.* 317a，*Pyr.* 317b の *mꜣˁti* は、いずれも動作の主語として登場する一方で，女神を示す限定符は付記されていない[36]。この点から，アレンは

mꜣʿti を「死者の裁判に参加する神格の集合名詞」とする新たな解釈を示し[37]，グリースハマーやスミスも「2 つの真実」と翻訳し，明言を避けている[38]。筆者も同様に，ここでの *mꜣʿti* が「二柱のマアト」の存在を示す最初期の事例であるとは断定できないと考える。しかし，*mꜣʿti* が死者の裁判の場面において裁判の内容を聞き，裁定を下す神的存在として現れていることは明らかである。

3　船として記述された「ピラミッド・テキスト」上の *mꜣʿti*

「ピラミッド・テキスト」のその他の *mꜣʿti* に関する記述のなかで，筆者は呪文第 260 番の *mꜣʿti* の記述と同様に双数形で示された *mꜣʿt* の記述を 3 例確認した。これらの *mꜣʿti* の記述は，いずれも *Pyr.* 317 とは完全に異なる文脈で示されており，それぞれが船の限定符を伴い記述されている。本節では，この 3 つの事例を史料の部分訳とともに検討していく。

［事例 3］*Pyr.* 1312-1315

［1312］

c :　*pḥwi P*[39] *pn m Ḥkt*

d :　*prii.f rf šwii*[40] *.f rf ir pt*

［1313］

a :　*ḫpd M*[41] *pn m msktt ḥnʿ mʿnḏt*

b :　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

c :　*ḥnn n P pn m Ḥpy*

d :　*pr*(*ii*)[42]*. f šwii.f rf. ir pt*

［1314］

a :　*mnti M m Nit ḥnʿ Srḳt*

b :　*prii.f rf šwii r.f ir pt*

c ;　*sbkwi M pn m bꜣwi ḫnt*(*iwi*) *sḫt ḏr*

d :　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

［1315］

a :　*ṯbwti M pn m mꜣʿti*

b :　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

c :　*sꜣḥw P m bꜣw Ꜣwnw*

d :　*prii.f rf šwii.f rf ir pt*

この P の臀部はヘケトである，彼が前に出て，天へ昇るために。

この M の尻臀は夜の船（*msktt*）と日中の船（*mʿnḏt*）である，彼が前に出て，天へ昇るために。

この P の陰茎はハピである[43]，彼が前に出て，天へ昇るために。

M の両大腿部はネイトとセルケトである，彼が前に出て，天へ昇るために。

この M の両下腿部は「果ての野」の前にいる 2 つのバー[44]である，彼が前に出て，天へ昇るために。

この M の両足底[45]は，「*mꜣʿti* の船」である，彼が前に出て，天へ昇るために。

P の足の指は，ヘリオポリスのバーたちである，彼が前に出て，天へ昇るために。

Pyr. 1312-1315 を含む呪文第 539 番は，王が昇天するための呪文である。呪文は大別して故王の体の各部を神や神的存在と結びつける前半部分[46]と，故王がラーの息子として昇天する後半場面からなる[47]。*mꜣʿti* の記述は，*Pyr.* 1315 a で故王の両足底（*ṯbwti*）に対応し，1 隻の船の限定符と双数形を示す 2 本の斜線（𓅱）を伴い「マアト」もしくは「マアティ」[48]と呼ばれる 2 隻の船として表現される。故王の足底と同一視された「*mꜣʿti* の船」は，ここで王の死後の世界の移動の役割を持つと考えられる[49]。この語に付記された船の限定符は，*mꜣʿti* の語が明らかにマアトの双数形 *mꜣʿti* として表記されながらも，先述の「二柱のマアト」のような神的存在とは異なる意味で記述されることを示している。筆者は以前の研究において，「コフィン・テキスト」に記述されたマアトの双数形（*mꜣʿty*）が，二柱のマアト女神とは別に，太陽神や下界の神ソカルに関連する側面を併せ持つことを明らかにした[50]。これらの側面には相関関係が予想されるため，マアトの双数形が併せ持つ各側面の分析は「二柱のマアト」の理解の深化に欠かせない。この事例において船として記述された *mꜣʿti* の側面は，「コフィン・テキスト」よりさらに時代の遡る「ピラミッド・テキスト」においても，マアトの双数形（*mꜣʿti*）が二柱の女神以外の側面を持つことを示している。単数形のマアトは，「マアトの船」と呼ばれる太陽神の持つ船の名称として用いられることから，この語も同様に，太陽神が航行するための船を指すと考えられる[51]。この呪文の中でも「マアトの船」は既に言及されているが，「*mꜣʿti* の船」，つまり「2 隻のマアトの船」との関係を明示するものではない[52]。

また，断片的にではあるものの，別の「*mꜣʿti* の船」の記述が次の「ピラミッド・テキスト」の呪文第 627 番から確認される。

［事例 4］*Pyr.* 1785b-c

［1785］

b :　[53]…*sšm N Rʿ m mꜣʿti.f*

c :　*hrw ḥts rnpt*

…N は，年を終える日[54]に彼（ラー）の「*mꜣʿti* の船」にいるラーを導く。

呪文 627 番の末尾にあたるこの文章の *mꜣʿti* は，限定符 𓄿𓄿から，「双数のマアトの船」を意図していることは明らかである[55]。また，*mꜣʿti* に続く接尾代名詞の *.f*[56]は「*mꜣʿti* の船」が太陽神であるラーの所有物であることを示唆する。

船の限定符を伴い描写される *mꜣʿti* の事例は少ないが，「マアトの船」の役割から，「二隻のマアトの船」も同様に太陽神の航行に関係する船を指すと考えるのが妥当であろう。古代エジプト人は，太陽神が現世と下界の航行を周期的に繰り返すと信じ，太陽が昇り，沈むまでの太陽の動きを太陽神の日中の航行と捉え，日没から翌朝の間に下界を航行すると信じていた。日中の太陽神の船は，*mʿnḏt* の船，夜間の船は *msktt* の船と呼ばれる。アルテンミュラーは，「コフィン・テキスト」における神格習合の視点から，*mꜣʿty* が先述の *mʿnḏt*，*msktt* と同一視されていたとする見解を述べた[57]。また，アンテスはそれぞれの語に付記された船の限定符の図像的特徴が類似することから，これらの 3 種の船が同じ船のグループに属すると述べている[58]。しかし，この事例においては「*mꜣʿti* の船」と *mʿnḏt*, *msktt* の関係を示す情報に乏しい。また，先に検討した呪文第 539 番（事例 3）においては，「*mꜣʿti* の船」と *mʿnḏt*，*msktt* の船の組み合わせは，別の船として描写されていた。したがって，これらの事例の内容のみでは他の太陽神の船との関係は特定できず，現時点においては，*mꜣʿti* を「太陽神の船」の一種として理解するに留めるべきであると筆者は考える。

最後に，イビのピラミッドに刻まれた「ピラミッド・テキスト」の一部に注目したい。*mꜣʿti* の記述を含むテキスト部分はイビの埋葬室の南壁に刻まれているが，その他の王族のテキストからは確認されていない。そのため，先行研究においてその内容はほとんど検討されておらず，管見の及ぶ限りでは，カリエによる翻訳が示されるのみである[59]。しかし，前接するテキストの一部が呪文第 627 番の記述と重なるため，*mꜣʿti* の記述を含む一連のテキストは呪文第 627 章の異形である可能性が高い[60]。情報が断片的ではあるものの，呪文第 627 章の内容とカリエの研究を参照しつつ，テキストの内容の解釈・翻訳をふまえて，*mꜣʿti* の内容を検討したい。

［事例 5］Jéquier 1935, L.626-L.632

［L.626］[61]　*iw irt Ḳ*[62] *pn m* [*nbt*?][63]

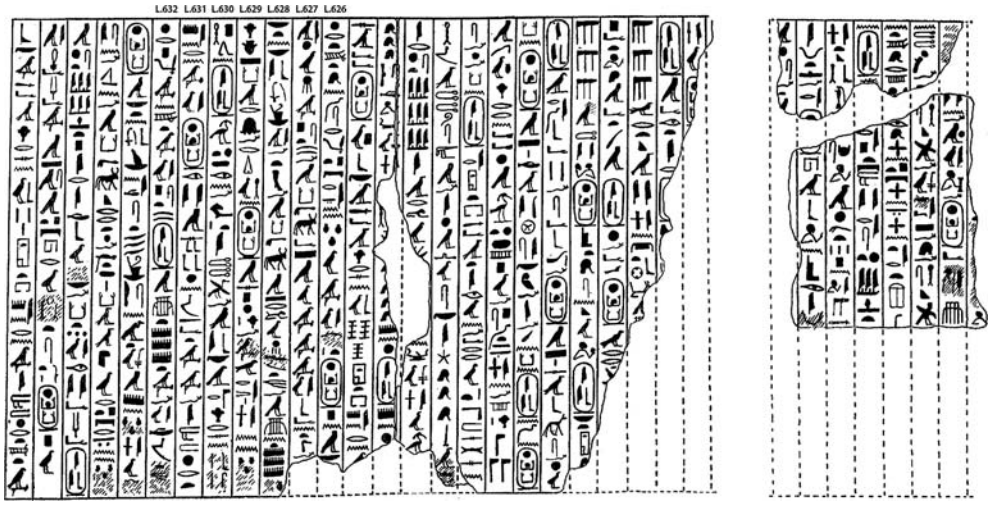

図 1　イビの埋葬室南壁（5 段目）に刻まれた「ピラミッド・テキスト」（Jéquier 1935, Pl. XII）

［L.627］　*i3ḫw spti.f mk3 ʿšmw*[64] *iw bʿnt.f …*[65]

［L.628］　*nbt nbi i3ft.f m k3 mšrw*[66] *dm3t*[67] *.f ḫnti mnw*[*t*] [*.f*][68]

［L.629］　*ḥri ib k3r.f*[69] *rdi*(*w*) *ḥw*[70] *n Ḳ m Zwnw ḥr.f wr*[71] *ir*[72]*-gs imy nnw*

［L.630］　*pḥ.n Ꞓ*[73] *3ḫt iri.n.f ḥ3t itt.f*(?)[74] *m bik ntr*(*i*) *ḥr znb* (*ḥwt*?)[75]

［L.631］　*imn*(*w*) *rn.f*[76] *iw Ḳ irii*[77] *m zbb*[78] *Rʿ n m3ʿti.f itt ḫrt*

［L.632］　*ḫrp n Ꞓtm*[79]

この Ḳ の眼は，太陽の輝きの主（？）である。彼の両唇は聖なる像の雄牛である。彼の首は炎の女主人（である）。彼のかぎ爪は夕方の雄牛である。彼の切り離された肢体はケンティメヌウトエフ，自身の祠の中央にいる者である。威令は Ḳ のために与えられた，太古の水の中にいる者のそばで，スウヌウヘルエフウルとして。

I は地平線へと到達した，彼がその名の隠された者の城壁（？）の上で，神の隼としてイチェチの前面（？）を作った時に。Ḳ はラーを彼の「*m3ʿti* の船」へ送る者，管理する者の所有物をアトゥムのために持ち去る者を演じた者である。

この一連のテキストは，呪文第 627 番に刻まれたその他の内容と同様に故王の昇天を物語るものであることが読みとれる。翻訳部分では，故王は神話上のホルスとオシリスと重ね合わされ，その神聖さが語られる[80]。その後，故王の神聖な隼としての地平線への到達，すなわち故王の復活が述べられ，続いて *m3ʿti* の記述を含む「ラーを彼の『*m3ʿti* の船』へと送る者」（*zbb Rʿ n m3ʿti.f*）が故王の形容辞として登場する。*m3ʿti* の記述は，従来の表音文字との組み合わせに続いて，神性な存在の限定符として用いられる台座の上に乗るホルスの隼の記号（G 7：𓅱）[81]が 2 つ並んで付記されている。［事例 4］に既に見受けられるように，同一の限定符を 2 つ並べて記載する双数形の表記法は古期エジプト語では一般的であるが，この事例では，より抽象的な意味を持つ限定符を伴うことから，この事例における *m3ʿti* が 2 隻の船を示していると断定することは難しい。しかし，この語に付記された三人称単数男性の接尾代名詞 *.f* は，この語が「二柱のマアト」のような独立した神格ではなく，太陽神の所有する何らかの神的存在の名称であることを示している。また，このイビのテキストが呪文第 627 章の異形でありながら，［事例 4］で示した呪文末尾の「*m3ʿti* の船」（*Pyr.* 1785b）の記述をもつ一文を含まないことを踏まえるとここで示された *m3ʿti* もまた，太陽神の船であると考えるのが妥当であろう。この故王の形容辞としての「ラーを彼の『*m3ʿti* の船』へ送る者」と類似した故人への形容辞は，後の時代の葬祭文学である『コフィン・テキスト』にも見受けられる[82]。筆者は以前の研究において「コフィン・テキスト」呪文第 682 章と呪文 693 章に見受けられた *m3ʿty* の記述が「太陽神の何らかの到達点」であるという見解を示した[83]。本稿で検討した「太陽神の所有する船」として描写された「ピラミッド・テキスト」上の *m3ʿti* の記述［事例 3-5］は，この見解に合致し，その内容を更に具体的に示す事例であるといえる。

4 おわりに

本稿では，古代エジプトの「二柱のマアト」の最初期の記述の内容を検証するため「ピラミッド・テキスト」の *mꜣꜥti* の記述を含む 5 例に焦点を当て，各事例の翻訳と解釈を踏まえて個々の事例の内容を検証した。［事例 1］，［事例 2］で示した呪文第 260 番上の 2 つの *mꜣꜥti* の記述は，「聞く」や「命じる」といった動作の主語を担うことから，何らかの神格として描写されていると考えられる。しかしながら，前後の文脈の解釈が多義的にとれることから，これらの事例が二柱の姿をとる女神としての「二柱のマアト」の最初期の事例であると断定することは難しい。

「ピラミッド・テキスト」上の *mꜣꜥti* の記述は，呪文第 260 番の他にも 3 例確認された。［事例 3］，［事例 4］において検証した二例では，*mꜣꜥti* の語が 1 隻もしくは 2 隻の船の限定符を伴い，この語が神聖な船の意味を持つことを明示している。特に［事例 4］は 2 隻の船の限定符とともに *mꜣꜥt* の語が記述され，それに太陽神を指す代名詞が付記されていることから，*mꜣꜥti* が太陽神の船として描写されていることがわかる。［事例 5］において読解を行ったイビ王の「ピラミッド・テキスト」の *mꜣꜥti* も同様に，その内容に不明瞭な点が残るものの，太陽神の船を指すと推察される。*mꜣꜥti* の語の持つ太陽神の船としての側面は，後の時代の葬祭文学における「コフィン・テキスト」にも描写されている。しかしながら，新王国時代以降の史料において *mꜣꜥty* の語が船として描写される事例は極めて少なく，そのため同時代以降の史料を分析対象とする先行研究では十分に注目されてこなかった。この太陽神の船としての *mꜣꜥty* の側面がどのような過程を経て，後の時代の「二柱のマアト」の概念に組み込まれていくのか，あるいは「二柱のマアト」とは別種の神的存在として理解されているのか，今後の研究では，異なる時代の史料の比較・検討と併せた考察が望まれる。

注

(1) 古代エジプト語の翻字（Transliteration）に際して，マアト女神や「二柱のマアト」のような女神としての固有名詞は，*Mꜣꜥt* や *Mꜣꜥty* のように通例的に頭文字が大文字で表記され，普通名詞は全ての文字が小文字で記される。本論文の考察対象である「二柱のマアト」は，*mꜣꜥti* の語の分析をおこなうまでは固有名詞と普通名詞（抽象概念 *mꜣꜥt* の双数形）の区分が不明瞭であるため，本論文では，固有名詞「二柱のマアト」を明確に指す場合を除き，いずれの場合においてもマアトの双数形を *mꜣꜥti* と表記する。

(2) 例えば，*Urk.* I, 57 ; *Urk.* I, 198. いずれの事例も *mꜣꜥt* は抽象概念として記述されるものの，語の末尾にマアト女神の限定符が付記されている。その一方で，「ピラミッド・テキスト」には *mꜣꜥt* に女神の限定符が付記される事例は確認されない。

(3) 「アムドゥアトの書」については，吹田 1996 を参照。

(4) Hornung 1963a, 9-10, Nr. 52, 53 and Plate of Erste Stunde ; Hornung 1963b, 17, 23.

(5) 例えば，Bleeker 1929, 61, Fig. 3 ; Seeber 1976, 142, Fig. 52 など。

(6) この他 *wsḫt nt mꜣꜥty*, *wsḫt tn mꜣꜥty*, *wsḫt tn nt mꜣꜥty* といった形でも表現されるが，基本的な意味は同じである。

(7) Breasted 1912, 299, n.2.

⑻ Bleeker 1929, 61.

⑼ Bleeker 1929, 61.

⑽ Yoyotte 1961, 61ff. ヨヨッテの述べるレトポリスの神話については，出典が明記されておらず，その詳細は不明であるため，典拠の再検討が望まれる。

⑾ Seeber 1976, 139-146.

⑿ Seeber 1976, 141.

⒀「コフィン・テキスト」については，肥後 2018 を参照。

⒁ Grieshammer 1970, 89-90 ; Altenmüller 1975, 71-72.

⒂ Altenmüller 1975, 71-72.

⒃ Smith 2017, 260.

⒄ この状況を示す好例として，近年出版されたバスマンの文法書が挙げられる。彼は以下のように読者に問いかけ，その回答を示している：“What might *mꜣʿtj* double justice mean?,” “Perhaps absolute justice, ...”（Bussmann 2017, 132, 256）。この解釈は，100 年以上前に提示されたブレステッドの解釈を支持するものであると考えられる。

⒅ マアトの双数形は，古期エジプト語においては *mꜣʿti* と表記される点を踏まえ，本論においても古期エジプト語史料に記された「二柱のマアト」の意味を示す語を *mꜣʿti* と表記する。

⒆「ピラミッド・テキスト」については，肥後 2015, 219 を参照。

⒇ Bleeker 1929, 60 ; Hornung 1963a, 17 ; Grieshammer 1970, 90 ; Seeber 1976, 140.

(21) ネイトの「ピラミッド・テキスト」にのみ確認される呪文（Faulkner 1969b, 87-88）。

(22) *LGG* に示されるように，「ピラミッド・テキスト」の呪文第 673 番（*Pyr.* 1998a）にも *mꜣʿt* の記述が二例確認される（*LGG* 3, 224）。しかし，ここでの *mꜣʿt* は文脈上，いずれも「導く」を意味する他動詞 *mꜣʿ* の能動分詞が女性名詞化されたものであると考えられる。したがって，本論文では抽象概念や女神としての *mꜣʿt* あるいは *Mꜣʿt* の事例としては扱わない。

(23) Jéquier 1935, Pl. XII, 631.

(24) Allen 2005, 3. この理由により，アレンをはじめとする多くの研究者はカカラー・イビのテキストの翻訳を行っていない。

(25) 実際に，フォークナーは呪文第 627 番の翻訳に際してペピ二世のテキストを底本としながら欠落部分の多くをイビのテキストを用いて補足している（Faulkner 1969a, 260-261）。

(26) 肥後 2015.

(27) ウニス（Wnis）の略。

(28) *zbii*, *iii*, *d*(*i*)(*w*)*w* を名詞化された完了能動分詞と解釈した。完了能動分詞の動詞形に関しては *AäG* 1, 303-305 を参照。

(29) *tfn* の単数女性形で示される。湿気の女神であるテフヌートと同じ綴りであるため，同一の女神であるとする研究者もいるが，文脈上，明確な神としての名称を示さない *tfn* に対応するため，女性の孤児であると判断した。

(30) Allen 1988, 11.「コフィン・テキスト」呪文第 148 章では，ゲブが遺産として遺したエジプトを支配するのは，その孫であるホルスであるとイシスが述べる（*CT* 2, 212d-213b）。

(31) *Komm.* 1, 391：“NN hat als kleines Waisenkind mit der Schwester gerechtet. Die beiden Wahrheiten haben verhört, es fehlte an einen Zeugen. Die beiden Wahrheiten haben befohlen,”；Piankoff 1968, 36：“Unas, a small orphan（tefen）, went to law with the sister（Tefnet）. The Two Truth judged, while Shu was a witness,” Faulkner 1969 a, 69：“I the orphan have had judgement with the orphaness, the Two Truths have judged, though a witness was lacking.”；Allen 2005, 46：“For judgement between orphan and orphaness has been made for Unis. The Dual Maat heard（the case）, Shu was a witness,”.

(32) *LGG* によれば，本節の *tfn* 及び *tfnt* は，この史料の他には見受けられない（*LGG* 7, 405）。

(33) 不変化詞 *iw* に連なる *sḏm.n.f* 形，あるいは受動態 *sḏm.f*。

(34) Altenmüller 1975, 71-72.

(35) 肥後 2018, 161.

(36) 限定符が記されない理由には，ウニスの「ピラミッド・テキスト」の表記法に由来する可能性が考えられる。ウニスのテキストには限定符をもたない神や女神の事例が極めて多く，イシスやネフティス，セルケトのようなその他の女神の名称にも限定符は付記されていない（e.g. *ꜣst*： *Pyr.* 32b, *Pyr.* 164 a, *Pyr.* 172a, *Pyr.* 210b； *Nbt-ḥwt*： *Pyr.* 164a, *Pyr.* 174a, *Pyr.* 210a, *Pyr.* 379c； *Srḳt*： *Pyr.* 489b）。

(37) Allen 2005, 435. アレンは双数形である理由が裁判員のいずれもが被告と原告両者のいずれかに属する点に起因すると考察している。

(38) Grieshammer 1970, 90； Smith 2017, 260.

(39) ペピ一世（*Ppy*）の略。

(40)「昇る」を意味する動詞であり，第三子音弱動詞に分類される（*Wb* 6, 431； Allen 1984, 573）。

(41) メリラー（*Mrỉ Rᶜ*：ペピ一世の即位名の一つ）の略。

(42) *Pyr.* 1303a と *Pyr.* 1313d のみ動詞 *pr*(*i*)に *ii* が付記されていないが，いずれも文脈上は仮定法 *sḏm.f* 形として表記されるべきであり，*ii* を補足した。

(43) 𓇋𓅱𓃛をゼーテがホルスの息子たちの一柱であるハピと解釈する一方で，フォークナーらは，陰茎との関係からハピではなく，雄牛の神であるアピスを指すと指摘している（*Komm.* 5, 233； Faulkner 1969a, 209, n. 10； Allen 2005, 170）。

(44) 双数形で示された *sbkwỉ* に対応し，バーも双数形で示される。*sḫt ḏr* は，「イアルの野」（*sḫt ỉꜣr*）や「ヘテプの野」（*sḫt ḥtpw*）と同様に死後の世界の場所を指し示しているが，他の事例が少なく，詳細は不明である。

(45)「サンダル」を意味する *ṯbt* とも解釈できるが，呪文は王の体の各部と種々の神性との同一視を示しているため，「足底」と解釈した。

(46) 創造神であるアトゥムとの同一性を示す（Biling 2018, 465）。

(47) 呪文第 539 番から 547 番までは，王墓の玄関部に置かれた像を神聖化するための儀式に関わる呪文とされる（Allen 2005, 205, n.133）。

(48) 双数形語尾-*ti* は，船が双数の船であることを示すと考えられるが，-*ti* の指す内容が双数であることに加えて，同時に船の名称にも影響を及ぼし「2 隻の *mꜣᶜti* の船」と呼称されていた可能性も否定できない。

(49) ジャックも同様の解釈を示しているが，ビリングのように神性の特徴に対応する体の部位の特徴との類似性は重要とされていないと指摘する研究者もいる（Jacq 1986, 136； Biling 2018, 466）。実際に同呪文において，故王の鼻とトート（*Pyr.* 1305c），心臓とバステト（*Pyr.* 1310c）のように，明確な類似性を持たない組み合わせが散見される。しかし一方で，「コフィン・テキスト」の呪文第 334 章の *ṯbt Rᶜ* と呼ばれる船（*CT* 4, 180u）のように，*ṯbt* と船の明確な関連を示す事例も確認される（Nyord 2008, 287）。

(50) 肥後 2018.

(51) *Wb* 2, 25.

(52) *Pyr.* 1306c-1306d：「この P の舌はマアトの船へ導くものである，彼が前に出て，天へ昇るために」（*ns n P m mꜣᶜỉ ỉr mꜣᶜt prỉỉ.f rf šwỉỉ.f rf ỉr pt*）。

(53) ペピ一世とペピ二世の 2 種のテキストのいずれも *Pyr.* 1785a の欠損が多く，前文との文脈が不明瞭である。

(54)「（年を）完結させる」を意味する動詞 *ḥts* に由来する（Hannig 2003, 912）。

(55) *Pyr.* 上ではペピ二世のテキストの文字しか確認できないが，アレンの新資料ではペピのテキストの断片も示されており，ここから少なくとも一隻の船の限定符が確認できる（Allen 2013, PT 627B）。

(56) *ꜥf* の上部の *t* が示す内容は不明瞭である。女性単数形の指示代名詞の *tꜥf* である可能性も考えられるが，*mꜣᶜti* が双数形であることから，*mꜣᶜt* の *t* の重複であると判断した。本来必要のない *t* を語末に付

記する女性名詞の双数形・複数形の事例は，古期エジプト語で記された他の史料や「ピラミッド・テキスト」にも散見される（*AäG* 1 93；*Pyr.* 1656b；*Pyr.* 1612a-1614a；*Pyr.* 1971；Anthes 1957, 85-86）。

(57) Altenmüller 1975, 71. しかしながら，この見解は［事例 1, 2］の中で疑問を提示したシューとテフヌートを「二柱のマアト」（*mꜣʿti*）と同一視する独自の解釈を前提とするため，*mꜣʿti* とその他の神格との習合関係については慎重に再検討する必要がある。

(58) Anthes 1957, 78. 同時にアンテスは，それぞれが異なる船として明確に区別されていた点も強調している（Anthes 1957, 80）。

(59) Carrier 2010. カリエによる「ピラミッド・テキスト」研究の第 4 巻目であり，メルエンラーやイビのテキストの他，ネイト，ウジェベトニのテキストの内容も網羅しており，後期の「ピラミッド・テキスト」研究において欠かせない資料といえる。

(60) L.630-L.637 は埋葬室の南壁に刻まれたテキストの左端部分に刻まれており，前接する L.625-L.629 は *Pyr.* 1778-*Pyr.* 1780 と部分的に一致する（Jéquier 1935, 17, Pl. XII）。

(61) L.626 上の *iw irt.f* から L.627 の *iꜣḫw* までをアレンはペピ一世，ペピ二世のテキスト上で欠落した *Pyr.* 1778 c に相当する内容であると判断し，イビのテキストの翻訳を組み込んでいると考えられる（Allen 2005, 244-245）。

(62) カカラー（*Ḳꜣ kꜣ Rʿ*）の略。

(63) 欠損につき *nb* もしくは *k* の文字の一部を除いて判読できない。アレンは *nb* を補足し，カリエは *nbt* を補うことで，続く *iꜣḫw* と併せて「太陽の輝きの（女）主」と訳している（Allen 2005, 245；Carrier 2010, 2230-2231）。

(64) または *ʿḥmw*（*Wb* 1 15-16；Hannig 2003, 289）

(65) 縦に 1〜2 文字程のスペースが欠落しているが，内容が合致する *Pyr.* 1779b（*iw bnt.f m nbt nbi*）では，接尾代名詞 *.f* と前置詞 *m* の間に文字は記されていない。

(66) *Pyr.* 1779c（*iw iꜣwt.f m kꜣ mšrw*）と類似。

(67) カリエは *dmꜣt.f m ḫnti mnw*[*t*]［*.f*］までを他のテキストで欠落する *Pyr.* 1780a であるとする（Carrier 2010, 2230-2231）。*dmꜣt* はオシリスの切断された遺体を指すと考えられるが，後の「コフィン・テキスト」には見受けられない（Hannig 2003, 1475；Hannig 2006, 2872-2873, van der Plas and Borghouts 1998, 317-322）。

(68) 字義通りには「自身の大腿部の前にいる者」。*Pyr.* 804c 上ではホルスの形容辞として大腿部の限定符とともに記述されるが，欠落部には *t* と *.f* の記述のみであったと予想される。

(69) *ḫnti mnwt.f* と並ぶ形容辞であると考えられるが，詳細は不明である。字義通りには，「自身の祠の中央にいる者」。*ib* と *kꜣ* の間に *š* のような記号が確認されるが，「池」*š* と読む場合，「自身の祠の池の中央にいる者」となり，より不可解な語となる。筆者はこの を *ḥri-ib* に付記された何らかの限定符であるとして仮訳を示した。アレンはこの部分を欠落した *Pyr.* 1780 a に相当するとし，*ḥr-ib kꜣr.f* を *ḫnti mnwt.f* の修飾する語句として解釈している（Allen 2005, 245）。

(70) 受動文の *sḏm*(*w*)*.f* として解釈した。*rdi* を用いた受動文 *sḏm.f* は「ピラミッド・テキスト」に複数確認される（Allen 1984, 655）。

(71) ジャキエの図版上では *Zpnw* と記述されているが，類似する *Pyr.* 1780 b の記述内容から *Zwnw* の異形と解釈した。

(72) 前置詞 *r* の完全形（*AäG* 2, 391-392）。

(73) イビ（*Ibi*）の略。

(74) は読解の極めて困難な箇所である。は *sḏm.n.f* もしくは能動完了分詞であると考えられるが，続くの意味が不明瞭である。カリエは *ḥꜣt* を「墓」と訳すが，墓に該当する語は通常 *ḥꜣt* では表されない（Carrier 2010, 2230-2231）。*itt* に三人称男性単数の接尾代名詞 *.f* が付記されるため *itt* は *sḏm.f* 形の動詞，もしくは名詞であることが想定される。しかしながら，畳音する第三子音弱動詞の *iti* にはの限定符は付記されず，目的語も記されていないため，意味の特定が現時点では困

難である。筆者は前接する *ḥꜣt* と併せて「イチェチの前面」と仮訳したがその内容は不明であり，今後改めて検討すべき点である。

(75) *Pyr.* 1788 a の類似表現から推定した。*Pyr.* 1788a では複数形 *znbw* で示されるが，欠損部の大きさから単数形で記述されたと考えられる。

(76) 三人称単数男性の接尾代名詞 *.f* は通例的に表記されない（Hannig 2003, 1584）。

(77) 完了能動分詞として解釈した。

(78) 第三子音弱動詞 *zbi* の未完了能動分詞として解釈した。続く *iṯṯ* も同様。

(79) *iṯṯ ḫrt ḫrp ꜥtm* に関しては，類似する *Pyr.* 1778b の内容を参考に仮訳を提示したが，「管理する者」（*ḫrp*）の意味など，不明瞭な点が残る箇所である。

(80) ホルスの体の部位として語られる「Ḳ の眼」（L.626 : *irt Ḳ*）や「彼のかぎづめ」（L.628 : *iꜣft.f*）に加えて，「彼の切り離された肢体」（L.628 : *dmꜣt.f*）は神話上のオシリスの遺体を暗示している。

(81) 本来は古王国時代にホルスの限定符として用いられていた記号であり，古王国時代以降には神々の古風な表記を示す限定符として使用される（Gardiner 1957, 468）。イビのテキストでも神性の限定符として頻繁に記述されており，翻訳部分では［*nbt*?］*iꜣḫw*, *kꜣ ꜥšmw*, *imn*(*w*) *rn.f*, *imn*(*w*) *rn.f*, *bik nṯr*(*i*), *iṯṯ ḫrt ḫrp*, *ꜥtm* に付記されている。

(82) *CT* 6 312o では死者が「ラーを彼の 2 隻のマアトの船」へ登らせる者」（*sꜥr Rꜥ n mꜣꜥty.f*）という形容辞で表現される。筆者は以前の研究において，この事例が船の限定符を伴わないことから，この事例を「船」と訳さず，ラーとの関連性を指摘するに留めた（肥後 2018，164-165）。しかし，本稿における［事例 3］や［事例 4］のような船の限定符を持つ *mꜣꜥti* の事例の内容から，おそらく *CT* 6 312o の *mꜣꜥty* も同様に太陽神の船を指す語として記述されていると考える。

(83) 肥後 2018.

略号一覧

AäG : Edel, E. 1955-1964, *Altägyptische Grammatik,* 2 volumes, Roma.

CT : de Buck, A. 1935-1961, *The Egyptian Coffin Texts,* 7 volumes, Chicago.

Komm. : Sethe, K. 1935-1962, *Übersetzung und Kommentar zu den Altägyptischen Pyramidentexten,* 6 volumes, Glückstadt.

LGG : Leitz, C. *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen,* 8 volumes, Leuven.

Pyr. : Sethe, K. 1908-1922, *Die altägyptischen Pyramidentexte nach den Papierabdrucken und Photographien des Berliner Museums,* 4 volumes, Leipzig.

Urk. : *Urkunden des ägyptischen Altertums*.

Wb : Erman, A. and H. Grapow, 1926-1963, *Wörterbuch der Ägyptischen Sprache,* 12 volumes, Leipzig and Berlin.

参考文献

Allen, J. P. 1984, *The Inflection of the verb in the Pyramid Texts,* 2 volumes, Malibu.

Allen, J. P. 1988, *Genesis in Egypt : The Philosophy of Ancient Egyptian Creation Accounts,* New Haven.

Allen, J. P. 2005, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts,* Leiden.

Allen, J. P. 2013, *A New Concordance of the Pyramid Texts,* 6 volumes, Providence.

Altenmüller, B. 1975, *Synkretismus in den Sargtexten,* Wiesbaden.

Anthes, R. 1957, "Die Sonnenboote in der Pyramidentexten," *ZÄS* 82, 77-89.

Billing, N. 2018, *The Performative Structure : Ritualizing the Pyramid of Pepy I,* Leiden.

Bleeker, C. J. 1929, *De Beteekenis van de egyptische Godin Ma-a-t,* Leiden.

Bussmann, R. 2017, *Complete Middle Egyptian : A New Method for Understanding Hieroglyphs, Reading Texts in Context,* London.

Breasted, J. H. 1912, *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt,* Philadelphia.

Carrier, C. 2010, *Textes des Pyramides de l'Egypte ancienne : Tome IV : Textes des Pyramides de Mérenrê, d'Aba, de Neit, d'Ipout et d'Oudjebten,* Paris.

Faulkner, R. O. 1969a, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts,* Oxford.

Faulkner, R. O. 1969b, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts. Supplement of Hieroglyphic Texts,* Oxford.

Grieshammer, R. 1970, *Das Jenseitsgericht in den Sargtexten,* Wiesbaden.

Gardiner, A. 1957, *Egyptian Grammar. Being an Introduction to the Study of Hieroglyphs,* Third edition, Oxford.

Hannig, R. 2003, *Ägyptisches Wörterbuch I : Altes Reich und Erste Zwischenzeit,* Mainz am Rhein.

Hannig, R. 2006, *Ägyptisches Wörterbuch II : Mittleres Reich und Zweite Zwischenzeit,* Mainz am Rhein.

Hornung, E. 1963a, *Das Amduat : Die Schrift des verborgenen Raumes, Herausgegeben nach Texten aus den Gräbern des Neuen Reiches, Teil 1 : Text,* Wiesbaden.

Hornung, E. 1963b, *Das Amduat : Die Schrift des verborgenen Raumes, Herausgegeben nach Texten aus den Gräbern des Neuen Reiches, Teil II : Übersetzung und Kommentar,* Wiesbaden.

Jacq, C. 1986, *Le Voyage dans l'Autre monde selon l'Egypte ancienne. Épreuves et Métamorphoses du Mort d'après les Textes des Pyramides et les Textes des Sarcophages,* Monaco.

Jéquier, G. 1935, *La Pyramide d'Aba,* Cairo.

Nyord, R. 2008, *Breathing Flesh : Conceptions of the Body in the Ancient Egyptian Coffin Texts,* Copenhagen.

Piankoff, A. 1968, *The Pyramid of Unas : Texts Translated with Commentary,* Princeton.

Seeber, C. 1976, *Untersuchungen zur Darstellung des Totengerichts im Alten Ägypten,* München and Berlin.

Smith, M. 2017 : *Following Osiris : Perspectives on the Osirian Afterlife from Four Millennia,* Oxford.

van der Plus, D. and J. F. Borghouts 1998, *Coffin Texts Word Index,* Utrecht.

Yoyotte, J. 1961, "Le Jugement des Morts dans l'Égypte ancienne," in Edition du Seuil（ed.）, *Le Jugement des Morts : Égypte ancienne-Assour-Babylone-Israel-Iran-Islam-Inde-Chine-Japon,* Paris, pp. 58-65.

吹田浩 1996,「アムドゥアト第五時－新王国宗教思想の一例－」, 富澤霊岸先生古稀記念会編,『富澤霊岸先生古稀記念　関大西洋史論集』, 図書印刷同朋舎, 77-101 頁。

肥後時尚 2015,「古代エジプト古王国時代のマアトの一側面－ピラミッド・テキスト第 260 番から」,『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture』, 第 2 巻, 215-228 頁。

肥後時尚 2018,「『コフィン・テキスト』における『二柱のマアト』（*Mꜣꜥty*）」,『オリエント』, 第 60 巻, 157-168 頁。

※本研究の内容に関して，ライデン大学の O. E. Kaper 教授から有意義なご助言を数多く賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

本研究は,「日本学術振興会　平成 30 年度若手研究者海外挑戦プログラム」（2018 年 4 月～2019 年 3 月）, および「高梨学術奨励基金　2019 年度若手研究助成」（2019 年 4 月～2020 年 3 月）による研究成果の一部である。

（関西大学大学院博士課程後期課程・ライデン大学地域研究研究所 客員研究員）